



# 漆という 生き物とともに

北岡 周治

聞き手・高地遥香 加治みゆき（石川県立輪島高等学校1年）

## 自己紹介

名前は北岡周治。家族構成は、じいちゃんにうち、嫁さんに息子、息子の嫁さん、娘、孫。7人で同居してる。

じいちゃんって親父のことやけども、じいちゃんは蒔絵師ではなくて漁師やった。

## 蒔絵師になるまで

蒔絵師を始めて37年になる。子どもの頃から蒔絵師になろうと思ってはいなかった。でも、高校卒業して1年間浪人して、大学行こうかどうしようか迷っているときに、地元で輪島にそういう「蒔絵」というのがあるって初めて知って、自分も絵が好きだったんで、蒔絵をやろうって思った。そう思った時は、蒔絵のことは全く知らなかったし、輪島塗自体もあまり知らなかった。けど、どうせ長男だし家にいなくちゃいけないってことで、地元でこういうすばらしい「蒔

絵」という仕事があるならそれをやってみようかなと思ったんで。

蒔絵師になるときに親の方からは何も言われなかったけど、ただ、大学行こうか悩んでいた時期だったんで、親としては、大変喜んでた。仕事は何であれ、地元に残るってことで。たまたまおじさんが塗りの仕事をしてたんで、おじさんにどっか紹介してくださいって頼んだ。ただね、私、高校時代野球部やってんけど、太もも太かったし、長時間あぐらをかくってというのができなくて、でっ入りしたときは非常につらかった。1時間座れなかった。30分も保つか保たないくらい。大変やったよ。それで、したくないトイレ行って。また座って。そういう繰り返し。2年間。やっていくうちにだんだん慣れてきて。2時間くらい座っていられるようになった。

でっ入りした頃に学んだことは、まず蒔絵の筆の使い方。型紙にまず自分で写して、それから、いらぬパネルで、線を引いたり、葉っぱ描いて塗ってみたりとか、そういう練習をした。



その頃は、漆で2回かぶれたこともある。

### 作品への想い

始めた当初、年期明けて独立したなりっというの、お椀とかお重とかお屠蘇（とそ）とか、そういうものに描くのが非常に多かった。お重に絵を描くとき、考えるのはやっぱりバランスやね。図案を描いているときに、一段ずつ別にしたときのきれいさと重ねたときのきれいさ、そのバランスをとにかく考えながら。

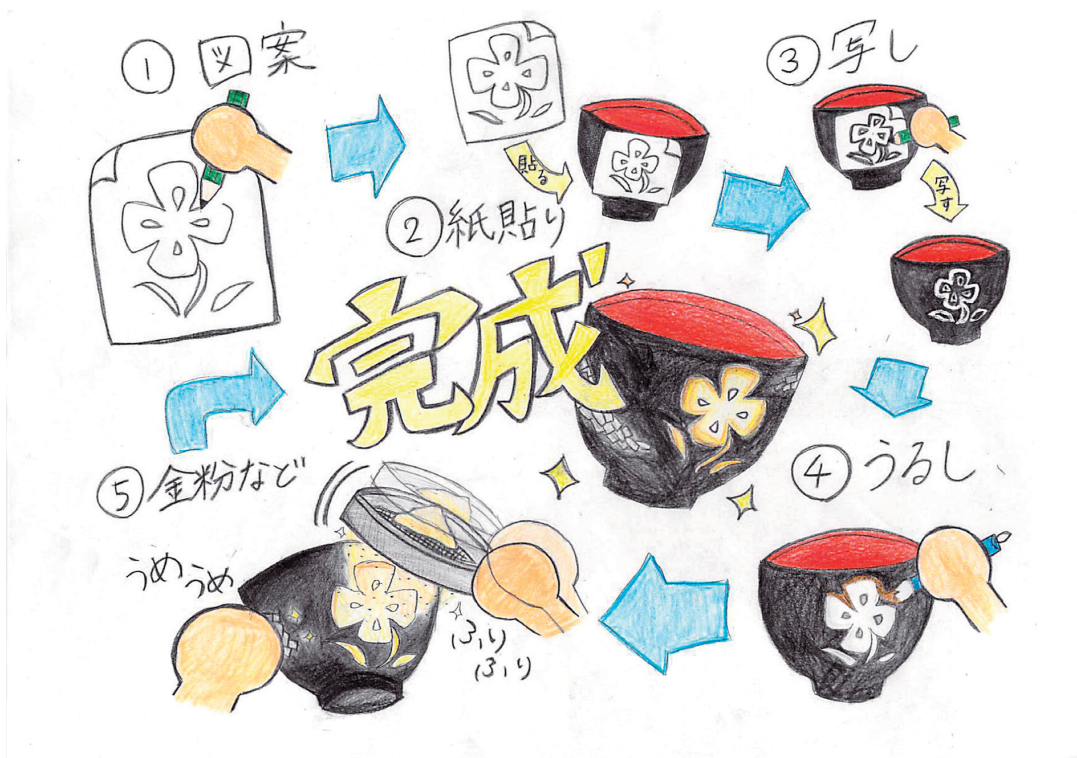
初めて作った作品については、思い出があるっていうよりも、下手くそやったなあと思う。まあその時はその時で一所懸命やったさか。それがあって、今があるんで、今があって、まだ先があるんで、やはり日々勉強が大事やなってつくづく感じております。

### 作業工程① ~図案を描く~

もう独立して30年たつんで、図案がね、いっぱいたまつてね、タンスの中全部そう。あのときのあれ描いてくださいと言われても、今はね、みんなデータに残したりしとるけど、当初全然しとらんかった。ひとつひとつ紙を貼って、型紙を作ることから始めんならん。でも、その型紙が私の財産です。まず、お客さんの声を聞いて、その人の性格とか何を求めているかとか、その辺をある程度理解しながら図案を起こしていく。お客さんてんでんに注文が違って、ニーズがいっぱい



(上) 筆 (下) お椀







(上) 型紙 (中) 盛り上げ (下) 螺鈿

あって、それに応えていくんであって、その度に描く模様などのきりかえをしていかなきゃいけない。お客さんから、難しいなっていうものを言われたほうが、「これでどうだ」って感じで工夫しながらやっていけるし、結構楽しい。

図案を描いているときにある程度の工程を自分で決めていく。ここには何をまいて、色はどういう風にしようかとか。図案が決まった時点で8~9割は作品のイメージができあがっていて、図案が決まるとすぐ集中っていうか没頭できる。無になっていける。それって、集中力を高めるというよりも、どれだけ無になれるか、そこに没頭できるか。

## デザインについて

デザインに関しては、日々新しい。数物、お椀とか、そういう物になると5脚セットとか10脚とかになるんですが、その場合は、同じ模様を描いていくんです。でも、単品物になってくるとまずほとんど違う。また、値段に応じて、デザインとか、仕事の内容を考えなければならぬから、難しいです。

## 作業工程②③ ~紙を貼って写す~

美濃紙(みのがみ)っていう、薄くて丈夫な紙を使う。平面の図案をつくるだけじゃなくて、お椀とか棗(なつめ)とかの、いろんな曲面に貼るものもつくる。貼りやすく破れにくいのが美濃紙。

結構、この型紙貼るのも難しい。のりを強くしすぎると品物にひっついてしまっただけでなくなる。そういうときは無理矢理はがさずに、お湯の湯気で1回戻してからはがす。

## 作業工程④ ~盛り上げ~

まず金をまく前に、盛り上げたい部分をいろんな上げ方で上げていく。

盛り上げはいろんな上げ方がある、漆で上げる上げ方や炭粉上げ、錆上げ(さびあげ)などがある。

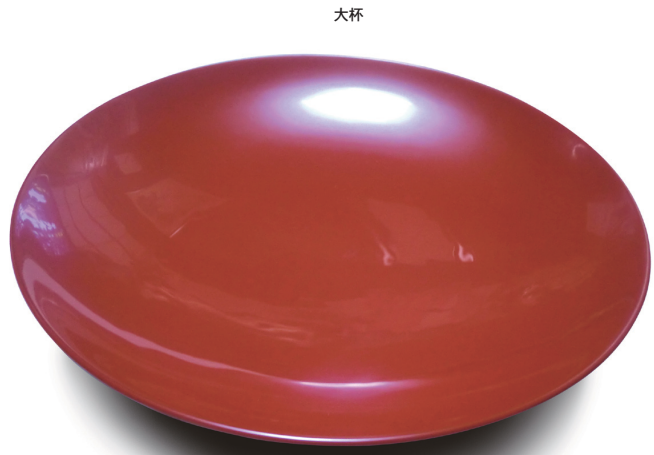
炭粉上げっていうのは、炭で高く盛り上げていろんな起伏をつけやすい盛り上げ方。錆上げっていうのは砥の粉(とこのこ)と漆を混ぜたもので上げる方法。上げる絵の、上げたい部分の質、品っていうか、岩とか木とか、そういう種類によって上げ方を変えたりする。漆と相性のいいものを選んで使う。

## 作業工程⑤ ~仕上げ~

金を埋め込んだり、金をまいたりする。金はたくさん使う。



罌



大杯

結構粗い金でやるもんだと、結構使う。

白いのは、蝶貝っていう厚い貝の白い部分を切り取って使う。他に、ばかりたりしてあるのは、粒子の粗い塗の粉、白塗りの乾燥した粉を使う。色が違うのは顔料を混ぜたりしてる。

貝は、螺鈿（らでん）っていうけども、角度によっていろんな光を出すんで、ピカピカッと光らしたいなあと思うた部分に貝を使ったりします。

粒子の細かさ、粗さは、金の光沢にも関係してくるんで、光沢を考えて、粒子の粗さを変えていく。他にも、螺鈿とか切金っていう金の板を切ったやつが、いろんな種類ある。その金の板っていうのは厚みがあるんで、その厚みにも合わせて粒子を変えていく。何を使っていくかも考えながら、粒子を変えていく。

この期間は、仕事の内容にもよるけど、工程がいっぱいあるので、やり方次第では数ヶ月、簡単なものと半月くらいかかる。

### 漆は生き物

37年経った今でも難しい。生き物相手やもんで。常に同じ思いになってくれない。季節が関係し、湿度が関係するもんで。試練を常に与えてくれる。同じ絵を描いてもスムー

ズに進む場合とそうでない場合があるし、その同じ漆で、たとえば、高く盛る「盛り上げ」の工程の中で、その季節によってはきれいに乾いてくれる場合と、「縮む」っていうんですけども、漆がきれいにならなくてしわしわになる場合がある。そうなると、また一からやり直さんなん。漆ってそういう生き物。非常にデリケート。やもんで、常に漆と会話しながらやってます。未だに失敗はあるけども、失敗して、また、それで学んでっていう繰り返し。

乾かすときに、漆の厚さと湿度が関係して、「縮む」。漆を厚くすればするほど、表面だけが乾いて、中まで乾かないもんで、表面が引っ張り合う。その時に「縮む」っていう状態になる。そのかわり、中は乾いてないので、やわらかいっていうことが起きる。暑ければ暑いほど乾きが速くなるから、縮む速さも速くなる。それに、風はあてない。ほこりがかかったりすると嫌なんで。

蒔絵には性格が出る。性格…まあ、タッチの違いっていうのがある。同じものを描いても、蒔絵師には自分のタッチっていうのがあって、なかなか同じにならない。

### 保存方法

お祭りではろうそくをたくんで、毎年お祭りが終わったら、うるしのはすぐに炭をきれいに拭いて手入れせん



らん。拭かないと光が鈍る。そして、そういう汚い膜が重なってくると、後で光らそうと思ってもなかなか光らないので、早いうちに手入れを済ませます。

塗り物の保管とか手入れで気をつける点は、やはり一つ一つを綺麗に包んでおく。それと、変色を防ぐために紫外線なるべく避けるようにする。

## 作品 ~つくばね~

作品には本物のつくばねに塗ったもんもある。つくばねって知ってる？ 秋に山に行くと、めったに目につかない、羽を広げたはねつきの羽みたいなのがいっぱいできる。名舟の山ではあんまり見ないけど、三井の辺にある。うちら小さい時、よく飛ばして遊んだもんや。つくばねは元々茶色いもんねん。漆をしただけでもすぐポキンと折れるんで、薬品でちょっと加工して、そんなに折れないようにしてんけども、結局は折れる。箸を置ければいいなあと思って作った。結局折れるもんで、納品はしなかったけど。飾り物としては御膳の上に正月飾ればいいなあってゆうとってんけども。

## 作品~夜叉面~

地元の名舟（なぶね）に伝わる御陣乗太鼓（ごじんじょだいて）を、3歳ぐらいから始め、小学1年生から本格的にやった。中学1年の時から大人に交じって、観光客の前で舞台に立ってた。御陣乗太鼓には、ひとつひとつ顔の違うお面があって、労働者、村の亡霊、だるま、そして、神の顔を表しているものがある。その神の顔、神の怒りを表すのが夜叉面（やしやめん）。自分が常に夜叉をかぶって、夜叉になりきるとるもんで、夜叉面を蒔絵で描くとき、面の表情は自分にとって出しやすい。夜叉面が好きだから、夜叉面を中心に描



夜叉面

くようにしています。

## 作品~大杯~

腕がぶらんうちに、お宝を、家に残す物を描きたいなあとは思ってる。そういうことをやりたいなっていうことで、20年ほど前に作った、一尺五寸の大杯があるんで、夜叉面でもいいし、地元名舟らしい物を何か描きたいなあと思ってる。

## 今、困っていること

最近、老眼が非常に進んできて困ってる。一番つらい。太鼓やとって指をもうつぶしてしまとるんで、きれいな曲線を引くのが大変です。

他には、図案に行き詰まる。考えが浮かばない。「これを描いてください」って見本もらえれば楽なんですけど、「こういう図、絵を描いてくれ」っていわれて自分でまず図案を描いて、見てもらって、OK出るまでっていうのがなかなか難しい。

## これから

息子は蒔絵をやろうとは言わないけど、息子にもさせてやりたいし、本人がやりたいって言わんもんでね。いつでもできる状態になとるし。孫が大きくなったら、やりたいって言ったら教えてやりたいし。まだ、1歳になってないから！もうお弟子さんは1人巣立っているし、職人さんも来て手伝ってくれたことが、10年くらいありました。嫁さんにも手伝いをしてもらったり。

若い頃は徹夜しながら頑張ってやってきたんで、後は好きなことやりたい。絵は好きだけど、仕事っていうことになるとやっぱりつらいことが多い。

## 北岡さんにとっての蒔絵

作品を作るときに気をつけていることは、客観的に見ること。やはりたくさんの方が目にするわけじゃないですか。だから、たくさんの方が目にしたときに、「あ、きれいやな」とか「これは誰が描いたんだろう」とか、そうやって見入ってくれるように描く。

自分の部落のキリコの屋根についている天板に、龍を蒔絵で書いた。それが37年間の作品の中で、一番。神事に使う後世に残るもんであるから、お祭りに、代々みなさんが見てくれる。その時に「あ、これが北岡さんの作品か」って思われるように、そして、恥じないように描いている。



キリコ天板の龍

輪島塗は、使ってみたら良さがわかる。ただ、高いから買わないとか、先入観だけで判断して欲しくない。修理きくんで、もう末代まで使える。ポイ捨てじゃなくて、ずっと受け継がれていく物だから、愛着を持ってほしい。

私にとって蒔絵は、もうでっち入りしたときにもう自分の天職って決めてかかったものやし。それしか道はないし、よそ見はしない。これ一本で、とにかく生活するんだって決めたもんやし。 [取材日：2013年8月6日・11月11日]

## PROFILE

**北岡 周治** きたおか しゅうじ  
昭和32年8月22日生・56歳・  
蒔絵師 御陣乗太鼓保存会事務局長

石川県輪島市名舟生まれ。19歳で蒔絵の道に入り、日々研鑽を重ねながら、後世に残る魅力的な蒔絵を広く伝え続けている。また、子どもの頃から名舟に伝わる御陣乗太鼓を叩き、多くの舞台で活躍する。平成11年に御陣乗太鼓保存会事務局長に就任し、御陣乗太鼓の発展に尽力している。



## ● 取材を終えての感想 ●

1回目の取材で初めて北岡さんに会ったときのことは、とても緊張していてあまり覚えていません。ですが、とても優しい人だと感じました。1回目の取材では、質問することが無くなって沈黙する場面がありましたが、何とかつなぐことができました。1回目の書き起こしは、2回目の取材の書き起こしよりも量が多く、2人で書き起こすにはとても時間がかかりました。

2回目の取材は、1回目の取材で聞けなかったことを中心に、北岡さんの作品をたくさん見せていただきました。北岡さんの作品はどれもきれいなものばかりで、温かみを感じました。特にキリコの龍は躍動感があって、とても圧倒されました。

これから経験することのできないようなことをたくさん経験できて、とても楽しかったです。

(高地遥香 写真：中央)

私はこの研修を通して、改めて「輪島塗」について知りました。

北岡名人の所へ初めて行って取材したとき、緊張していたことと、質問をあまり考えていなかったことで時間が余ってしまい、上手く取材ができませんでした。2回目の取材では、1回目で聞けなかったところを2人で助け合ってちゃんと聞くことができました。

北岡名人は2回目の取材のとき、作品をたくさん見せて下さいました。キリコの龍や棗など、とてもきれいでした。作品を見せていただきながら作業工程の話をついたとき、「工程が多すぎる」と聞き、やっぱり作品1つ作るのは大変なのだなぁと思いました。

取材も書き起こしも大変でしたが、最終的なレポートの構成に苦労しました。わかりやすい

文章にするのは難しいのだと知りました。

最後に、いろいろと苦労はしたけれど、私はこの研修で良いことを学ぶことができたと思いました。

(加治みゆき 写真：右)